

文化の交差点

bunka to bunka no kousaten

2022年青芝号



contents...

サークル見聞録

劇団木霊 2022 年本公演

『職業的天使の祈り』を観て p 1

今日もサークル日和

～ある日の学館と隈裏～ p 2

Essay

『同志少女よ、敵を撃て』（逢坂冬馬氏）書評 p 3

「文化の交差点」2022年青芝号

発行日：6月27日

発行者：「文化の交差点」編集委員会 代表・神原（教育4年）

連絡先：090-2331-4456

waseda-bunren@hotmail.co.jp



劇団木霊2022年本公演

『職業的天使の祈り』を観て

(5月26日～5月29日 大隈講堂裏アトリエ)

「リングは赤いか、白いか」——戦争で多くの人々が命を落とし、遺体が日々運ばれてくる火葬場。祈りを捧げる天使と、遺体を焼き続ける葬儀屋。人間の“痛み”を求めて外へと飛び出したアリア……それぞれの登場人物が、死神との対話を経ながら話が進んでゆく。

木霊のみなさんの表現や演出がどれも素晴らしかったです。とくに火葬場での葬儀屋と天使の言葉の掛け合いは臨場感があり、冒頭からぐっと惹きこまれました。長椅子に黒布をかけた瞬間、「棺」が現われる。ないはずの死体が存在している…光の演出も良く、雰囲気がとても出ていました。

火葬場の世界と絡み合いながら、外の世界で凜子という人物の日常が描かれていく展開もまた、本公演の見所。それまで観客を圧倒していた人間の無数の死を、次第に凜子の生きる姿が押しつけてゆく。人間の生と死のあり様が一気に具体性をもって迫ってくる展開に、感動しました。

「私は生きていた！」——凜子がアリアと邂逅し光の中で叫ぶ瞬間と、天使が眠りから覚め死神が退出する場面はとても良かったです。衣装も世界観にぴったりでした。また楽しみにしています。(わらび餅)



今日もサークル日和

～ある日の学館と隈裏～



←4限終わりの休み時間、キャンパスから学館に続々と集まるサークル員(学館正面入口)

→公演に向けての練習に熱が入る(学館B2ダンス練習場)



←看板作成中～アイスをはおぼりほっと一息(学館B2看板作成場)

→「制作」部門の新人訓練中。新人にとっての暑い夏は始まったばかり(隈裏の劇団木霊アトリエ)



撮影にご協力いただいたサークル員のみなさん、ありがとうございました(撮影日:6/24)



2022年本屋大賞受賞

『同志少女よ、敵を撃て』（逢坂冬馬氏）書評

はじめの数ページをめくっただけで、ただならぬ書だと感じた。1942年、独ソ戦の只中でドイツ軍に襲われ、母親と村人を失ったイワノフスカヤ村の少女セラフィマと、少女を救うも村を丸ごと焼き払った赤軍の女性兵士イリーナ。セラフィマはドイツ狙撃兵だけでなくイリーナへの復讐も誓い、彼女が指揮官を務める狙撃専門の訓練学校に入隊する…

本書は小説でありながら、フィクションとはとても言えないほどの徹底したリアリズムを貫いている。独ソ戦で最も激しい攻防となったスターリングラードの戦い——少女セラフィマはいくつもの死線を乗り越える。実際の戦闘で命を落としたソ連・女性兵士たちの心の叫びが行間から甦り、私たちに語りかけてくる（この書は独ソ戦の犠牲となった全ての人々に捧げる鎮魂歌でもある）。

最大の見所は、自分と同じ境遇の仲間たちと心を通わせながら人の生き死にを幾度も経験してきたセラフィマが、真の「敵」とは一体誰なのか、その核心に迫っていくところだ。主人公たちの心の内面、その成長に焦点をあてた筆者・逢坂氏の激しい筆致に、読者は想像力を掻き立てられずにはられない。

見張り役のウクライナ人・オリガが、最後にセラフィマにこの戦争への胸のうちの明かした場面は、ぐっときた。もし彼女たちが現代に生きていたならば、戦争が続くこの世界を必ず、創造性あふれ、平和で豊かな社会へと導いていくに違いない。(炭酸水)